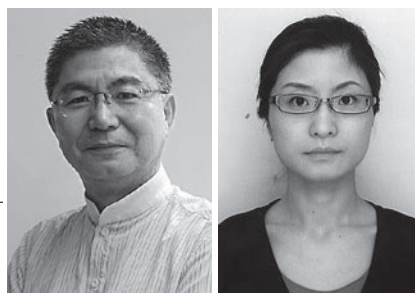


# Essay 03#

## 絶望の先に光を

—Quality of Life から Quality of Lives へ—

堂園メディカルハウス／鹿児島大学医学部麻酔科  
堂園 晴彦／向原 桂香



竹之下先生から執筆を依頼されました。竹之下先生は、私の小・中・高の一年先輩で、いろいろな面で大変お世話になっております。

私は慈恵会医科大学卒業後、国立がんセンターでレジデントとして、手術は小山靖夫先生、森谷宜皓先生に、化学療法は西條長宏先生に学びました。その後、慈恵会医科大学、鹿児島大学で、骨盤外科医、婦人科癌のオンコロジストとして研鑽してきました。1991年に父の診療所を継承し、当時では非常に珍しい在宅ホスピスを開始し、1996年から有床診療所で外来－在宅－入院を同一スタッフで行うホスピスを主に展開しております。年間約100人を看取り、在宅経験者は約40%、そのうち約25%が在宅での看取りです。

一番力を入れているのが、「遺される子供たち」へのケアです。

両親や祖父母と肯定的な別れをした子供は、その後の人生を肯定的に送り、否定的な別れをした子供は、その後の人生を否定的に送りがちです。

一人の患者さんのQOLは、その患者さんとかかわりを持つ方々のQOLに深く関与しています。そこで、患者さんのQuality of Lifeだけを考えるのではなく、患者さんと深くかかわりがある方々のQuality of Lifeも考えて治療が必要があると、多くの方を看取り、切実に思うようになりました。

「Quality of Life から Quality of Lives」という新しい概念が癌治療、特に致死的患者さんに

携わる医師には大切です。

その概念の必要性を強く感じた経験を述べたいと思います。

### 「絶望の先に光を」

11歳の子供を持つ母親が入院して来た。一見して、死期が迫っていると感じた。数日前に入院の相談に来られた。その時、「死にたくない。娘のためにあと1年は生きたい」と、語った。

がんがわかったのはわずか数か月前で、その時すでに全身の骨に転移をしていた。必死で高額な放射線治療を受け続けた。

入院時の血液検査では、骨の転移と放射線治療の影響で骨髄機能が急速に悪化し、DICの状態では血小板が8000になっていた。いつ体のあちこちで出血が起こってもおかしくなく、何もしなければ一両日かもしれない値である。

同僚の向原医師が、夫と娘さんに現状を説明した。夫は愕然とし、娘さんは小さな体を震わせ、何時間も泣きじゃくった。これからのあまりにも残酷な経過を考えると絶望的になり、胸が詰まった。

一体今までの医者は何を考えて治療をしていたのだろうか。

病気ばかりを診て、人間をまったく診ていない。今回だけでなく、今回に似たような患者さんを

## Essay 03#

よく診る。現在の日本のがん治療に絶望感すら抱いてしまう。今後も今回のような患者さんを診る機会が続くと、ホスピス医を続ける情熱がなえてしまいそうだ。

向原ドクターが子供のために血小板輸血等積極的な延命治療を提案した。スタッフも望んだ。私は基本的にはDIC時の血小板輸血等の延命治療は通常はしない方針だが、娘さんにとっては、1秒が1分、1分が1時間、1時間が1日、1日が1カ月の価値があると判断し、向原ドクターの提案を受け入れた。

翌日は奇跡的に意識も回復し、介護入浴もでき、娘さんの介助で食事も少しだが摂れた。私の胸のつかえもいく分か取れた。

これまでの経験から、肯定的な別れをした子供は、その後の人生を肯定的に生きられるようだ。患者さんは遺書を書くからと、夫に厚いノート

注文した。

スタッフ全員で肯定的な別れができるように努めている。

それが11歳の娘さんにとって光となるに違いない。

患者さんが木曜日に亡くなれた。10日間も頑張った。

子供さんの誕生日が土曜日だった。

私は父親に、「誕生日をしてからお葬式をしましょう」と、提案した。

父親は、「お葬式が誕生日ではかわいそうだし、お葬式の後に誕生日もやるせない」と話され、私の提案を了承し、土曜日までメディカルハウスの霊安室に安置し、お誕生日会を催した。



① 院内さんぽ ② 食事介助 ③ 誕生日会 ④ お母さんへのケーキ

私は霊安室を建物の中で一番いい場所に作った。よくある薄暗いジメジメとした霊安室は、亡くなられた人に失礼であると思ったためである。人は亡くなった後も尊厳が保たれるべきである。

お友達も数人来てくれた。一人は、祖父を最近、堂園メディカルハウスで肯定的に看取っていたため、死者に対して恐怖心を持っていなかった。

私たちスタッフはケーキを差し入れし、入院してから母親と一緒に撮った写真を写真立てに入れてプレゼントした。

娘さんは母親にもケーキをあげていた。

見送りの時、父親が、

「妻が、娘の誕生日までは頑張って、誕生日のお

祝いをしたいと言っていました、その通りのことができました」

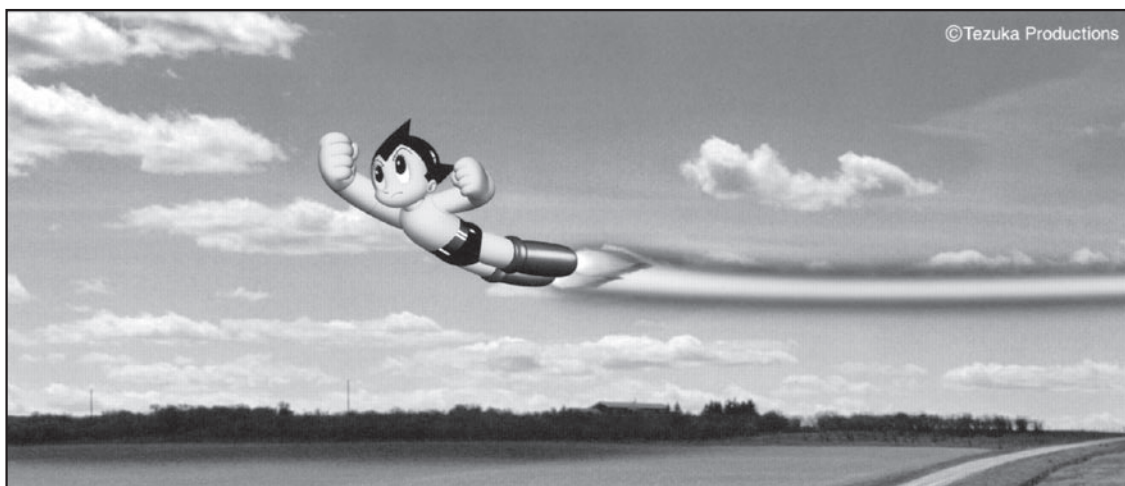
と、言われた。

死後も生きていたのだろう。

肯定的な別れをした子はその後の人生を肯定的に生きられる、私の経験である。

以前 quality of life ではなくて quality of lives という概念が必要であると、論文に書いた。

人は一人で生きているのではなくて多くの life と共に生きていることを患者さんも家族も、そして、医者も忘れないでほしい。



©Tezuka Productions

製造販売元 **Eisai** エーザイ株式会社  
東京都文京区小石川4-6-10

商品情報お問い合わせ先：お客様ホットライン  
☎0120-419-497 9~18時(土、日、祝日9~17時)

●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意については、添付文書をご参照ください [PRT1011M04]

処方せん医薬品  
注意一医師等の処方せんにより使用すること  
プロトンポンプ阻害剤 [薬価基準収載]

**パリエット**® 錠10mg  
錠20mg

〈ラベプラゾールナトリウム製剤〉 [www.pariet.jp](http://www.pariet.jp)